

フィリピン西ネグロス州バゴ市タロック村 Overseas Filipino Worker

文学部英文学科 K. M.

はじめに

私は国際平和研究所が主催する「フィリピン・エクスポージャー・プログラム」に参加し、フィリピンネグロス島を訪れた。目的は海外へ出稼ぎに出ている人々の暮らしぶりを実際に見て現状を知り、行く事になった理由などを聞き、出稼ぎ労働者について知ることであった。さらに、事前学習で学んだ平和概念をもとに暴力を発見し今自分たちにできることが何かを考え、2月から12日の3泊4日では西ネグロス州バゴ市タロック村で過ごし、聞き取りを行った。そこで私は女性の海外出稼ぎ労働者(Overseas Filipino Worker)から直接、もしくはその家族にインタビューを行った。インタビューでは出稼ぎに出た理由、収入や支出、労働者やその家族に起こっている問題などを質問し、現状を伺った。

本報告書では、現地での調査をもとに、エクスポージャーの5段階アプローチに沿って OFW を取り巻く暴力と自分との関係性について考察したことを述べる。

1. バゴ市での聞き取り調査

OFW が出稼ぎに行く理由は様々であるが、私がここで取材した人々のほとんどは経済的に問題があることが理由であった。調査を進めていくにつれて、共通点や人々を取り巻く暴力が見えてきた。大学を出ていても、フィリピンではきょうだいを学校に通わせるたり、家族の医療費を賄うのに十分な収入を得られる仕事につくことが難しいと多くの人々が言っていた。だから高い収入を得られる海外へと仕事に行くのである。しかしそれと同時に様々な問題も伴っていた。

インタビュー1: Cさん

Cさんの家族にインタビューを行った。Cさんは現在35歳。マレーシアに家政婦として出稼ぎに行っている。その理由は子供の医療費のためである。彼女には7歳・5歳・2歳の子供がいて、2番目の子供は白血病を患っている。夫は、収入が一日300ペソの建設の仕事をしている。家では、母が、家の軒先にあるサリサリストアという、ジュースやお菓子から日用品などを扱う小売店を開きながら子供たちの世話をしている。Cさんの今回の出稼ぎは二度目で、前回の出稼ぎはドバイでの家政婦の仕事を2年間契約で行っていた。今回はマレーシアで2016年から2018年までの二年契約で出稼ぎをしている。海外へ出稼ぎに行く理由は、フィリピン国内では十分に稼げる仕事を見つけるのが難しいからだ。Cさんは雇用主の家に住み込みで働き、給料は月約2,000ペソ(日本円で4,516.85円:2017年3月17日現在)でそのうち家族に1,500ペソ仕送りをしているという。家族はCさんの稼ぎを頼りにしている。サリサリストアの売り上げは1日300~500ペソの稼ぎがあるが、元手を引くと手元に残る収入は少ないという。2番目の子供の病気は1歳の時に発見された。現在治療費は3か月に一度の診察が2,000ペソ、1か月

に一本処方されている Macro-bee というビタミン剤が 195 ペソである。合計すると一年間に必要な治療費は 10,340 ペソということになる。C さんの一年間の仕送りから医療費を引くと、その他家族の生活のために残るのは一か月に約 500 ペソということになる。家族たちの生活に必要な一週間の出費が約 500 ペソと言っていたので、家族の生活を C さんの仕送りで補うには十分とは言えない。

インタビューの途中に、Facebook で C さん本人と連絡を取ることができた。彼女は住み込みで働いているため朝 5 時半から夜 10 時まで休みなく毎日働いている。暮らしをどう感じているかを聞くと、休み無しの過労や睡眠不足、家族に会えないこと、外出が許されていないことが辛いと言っていた。

インタビュー2：J さん

J さんは現在 34 歳、過去に 8 年間シンガポールで家政婦として働いた経験がある。J さんは 20 年間出稼ぎの経験がある母に会社を紹介してもらった。自分から会社を見つけることは簡単ではないと言っていた。出稼ぎに行った理由はきょうだいの手助けをするためである。現地では月曜から土曜、朝 6 時から夜 10 時まで家政婦として働き、休みであるはずの日曜にはほかの家でさらに 4 時間家政婦として働いていた。収入は、為替レートによって変動はあるが、月に 10,000 から 14,000 ペソだった。そのときによって収入が違ったので家族への仕送りも月によって様々であった。暮らしの環境は厳しく、家族に会えないことが辛かったという。さらに、バゴ市でインタビューした人々の中で J さんだけが雇い主からひどい言葉を浴びせられたと答えた。そんな時彼女は自分の心を押殺し、何も考えずただ働き、同様に稼ぎ出している知り合いに会ったときは相談してアドバイスをもらった。

今は貯金のためにあまりお金を使わないようにしていて、フィリピンで休養しつつ雇い主を待っている時期だと言っていた。彼女はまた半月後くらいに出稼ぎに出ようと考えている。なぜならフィリピンでは 25 歳を超えると女性は仕事を見つけるのが難しく、収入の無いまま今の家に留まり続けることは困難だからだ。

インタビュー3：L さん

L さんは現在 43 歳、2006 年から 2009 年の 3 年間、子供の教育費のために香港へ家政婦として出稼ぎに行っていた。契約は 2 年と 1 年に分かれている。香港に行く前、子供は 10 歳・7 歳・1 歳であった。子供のためでもあるが、フィリピンには短期的な仕事しかないことも理由の一つだと言っていた。L さんは友達に聞いて ADANA という会社に申し込んで仕事を見つけた。交通費は会社が出してくれたという。住み込みで働いていたため休みの日はなく、朝 5 時半から夜 9 時まで働いた。収入は月に 23,000 ペソで、そのうち 18,000～20,000 ペソを仕送りした。そこでの暮らしは雇い主が良い人だったため辛くはなかったという。しかし家族に会えないのはとても寂しく子供のことが心配だったため、Skype や携帯電話のメッセージなどで連絡を取っていた。L さんは今も雇い主と仲が良く、Facebook でも友達である。雇い主はまた家政婦として戻ってきてほしいと言っているが、子供が行ってほしくないと言っているため L さんは戻らないと言っている。

2. 5ステップスにそって

2-1 暴力

最もあらわになっている問題としてはフィリピンで十分な稼ぎのある仕事を見つけるのが難しいということだ。インタビューした人に限らず大勢の人がこの問題を抱えている。そのために同国よりも高い収入を得られる国へ出稼ぎに行き、仕送りをするという現状が続いている。その現実が当たり前になっている社会が構造的暴力であると私は考える。そして出稼ぎ先では休日の無い長時間労働を強いられているケースが多い。それは雇い主から見てフィリピン人だから軽くあしらっても良いという差別的なイメージがあるからだと言っている人もいた。さらにそのイメージが増して蔑みや悪態をつくような言葉をかける雇用主のもとで働いていた女性もいた。これは直接的暴力である。しかし彼女は雇われている身だから、家族のためだからと、身近な人への相談はあったものの、ただ我慢していた。また、日本へ出稼ぎした人に対する差別的な意識を持つ人もいた。

2-2 自力更生

まず、十分な収入が得られる仕事が無いことに対する努力は出稼ぎに出るという決意である。そして出稼ぎ先では家族と連絡を取り寂しさを解消する努力をしている。雇い主から悪い言葉を浴びせられたJさんは、ただその言葉を受け入れ、泣き、自分は強くならなければならないと思い仕事に集中するとともに、友達に相談してアドバイスをもらっていた。そのアドバイスの内容を聞くことができなかったが、相談するという行動が自力更生への一歩である。一度戻ってきた人が再び出稼ぎに出るということも自力更生への努力である。

2-3 阻害要因

しかしその人々の努力を阻害するものもあった。それは国内に仕事が無いという事実が当たり前になり、海外出稼ぎが歴史的、文化的に定着していることだ。また、フィリピン政府は海外労働者の送り出しを促進している。そのために仕事を求める人は海外へと出稼ぎに行き、お金を作って帰ってくる。このままでは国内に仕事が無い現状が変化することはないだろう。Jさんの友人からのアドバイスもJさんが不当な仕打ちを受けている状況から抜け出すことに対しての阻害要因だった可能性がある。また、人々の国に対する意識も出稼ぎ労働者への差別意識を無くすことに対する阻害要因であると考えられる。インタビューした人々の中で、雇用先でのひどい仕打ちや労働条件の悪さに対して対処をしていた人は少なかった。なぜなら雇用主に反抗すれば家族のために折角得た仕事を失う可能性があるからだ。インタビューをした人の中には、日本へ出稼ぎに行った友人は家族や友達に日本へ行ったとは言わずにその近隣のアジアの国と言っていたという人がいた。なぜなら「じゃぱゆき」という言葉で呼ばれ、差別されてしまうからである。それはフィリピンから日本へ「エンターテイナー」が沢山送り出されていた時代があったからである。Jさんが受けていた雇い主からの悪い言葉や、多くの人が言っていた雇用主から長時間労働を強いられていたのも、この差別意識が原因であると考えられる。

2-4 連帯

海外に働きに出るすべてのフィリピン人は海外労働者福祉庁(OWWA)のメンバーになる。海外

出稼ぎする人は、契約時に 25 ドルを払い、そのお金は海外労働者への福祉サービスに使われる。海外労働者が渡航先での死亡や、事故に遭った際の援助や帰国支援、医療支援、渡航先での法的支援やケア、帰国者向けの自立生計支援などのプログラムがある。しかし OFW にとっては契約金が負担になり、保障を受けられていない者もいる。インタビューの中ではこれらの名前を聞くことはなかったが、海外に出る前に国内で数年間研修をしていた OFW もいた。

NGO の中には OFW をサポートする組織が多くある。たとえば DAWN(Development Action for Network)は、日本で働いていた時の経験で心の傷を負ったフィリピン人移住女性労働者とその子供たちであるジャパニーズ・フィリピノ・チルドレン（以下、JFC）の人権及び福祉の促進と保護のために設立された¹。カウンセリングと法律相談および福祉サービス、自立生計支援、調査・問題提起のための活動などを主に行っている。帰国した移住女性労働者と JFC の一時的シェルターをマニラに置き、身の危険や苦しい状況に置かれていることを対象に支援している。

KAKAMMPI（カカンピ）はマニラに本拠を置き、出稼ぎに出ているまたは帰国後の OFW やその家族が抱える問題への支援や情報提供、自立へのサポートを行っている NGO である²。スタッフは全員ボランティアである。活動内容は幅広く、心や体のカウンセリング、託児所・シェルターの設置、国内外に向けたラジオ放送、他の NGO や政府団体とのネットワークを広げるなどである。

2-5 関連関与

バゴ市でのホームステイやインタビューを通して、ホームステイ先の同じ集落に住む女の子の母親が出稼ぎに行っていたり、六人きょうだいのうち半分が出稼ぎに行っていたりと、自分の想像していた以上に OFW は近くにも沢山いることがわかった。人数は約 1000 万人³と言われ、人口の 10%ほどである。それが人々にとって当たり前になっているように感じた。家族にインタビューした時は出稼ぎに行く本人の状況や会社などよく知らない人もいた。そして OFW にもその家族にも、お金が手に入る代わりに色々な犠牲があることに気が付いた。それは実際に現地で聞き、現状を見なければわからないことであった。しかし自分が今何かをして助けるという方法を見つけ出すことはできなかった。これからは DAWN のような NGO などの活動を自ら学び、まずは問題解決に協力できることを探すことやボランティアへの参加、またはこの報告書などのように文書を利用して学んだことを人々に伝えていきたい。

¹ JFC Multisectoral Networking Project

<http://jfcmultisectoralnetworkingproject.org/index.php/ja/dawn> (2017/03/18 アクセス)

² APFS ホームページ <http://www.jca.apc.org/apfs/>. (2017/06/29 アクセス)

³ JILAF ホームページ http://www.jilaf.or.jp/country/asia_information/AsiaInfos/view/25 (2017/06/29 アクセス)